

## 討 論

### 応用科学における方法論的検討

—往復書簡集より—

狩野 広之

Hiroshi KANO (Institute for Science of Labour)

斎藤 幸一郎

Koichiro SAITO (Keio University)

#### 狩野広之先生

このたびは、先生の「人間科学における実験について」論文抜刷を御送り頂きまして、まことにありがとうございます。

全く偶然の雑談で太田垣さんが、狩野先生の論文で深い感銘をお受けになったといつておられ、そのとき、要点だけ承って一応小生も満足した気でいたのですが、その後、先日は、これまた全く偶然の雑談でそのことを何気なく千鶴さんにお話申上げたのがもとで、早速に論文を御送り頂くことになったという次第でした。

熟読させて頂きまして、小生もあらためて、太田垣さんに劣らずこの上なく深い感銘をうけた次第です。日頃、小生も、種々な実験的研究のペーパーなど見るにつけ、何か、モヤモヤしたスッキリしないものを、ただ何となく感ずることが多かったのですが、その理由が何であったかを、先生の論文を拝読させて頂くことによって、全く余すところなく指摘して頂けたように思います。それで、ある意味で自信を持たせて頂きましたし、ある意味で百万の味方を得させて頂きました。おそらく、その意味で、今回の先生の御指導は、小生の研究生活にとって一つの転機をつくって下さったと存じ、心から感謝申し上げる次第です。

小生は、これまで、人生における重大なものごとであればあるほど、全くの偶然によって左右されるものだ、といった感想をもっていたのですが、こんどのことは、まさに、そのひとつであったと存じます。

多少具体的に申しますと、小生たちはいま、人間の価値感の研究というので種々の試みをいたしておりますが、どうも壁にぶつかって、ケーラーの動物のように



「振子運動」をくりかえしていたところでしたら、先生の論文での「……ほんとうの個人差ではなくて、ルーズな実験操作からくる偶然の変異にすぎない……」、「……例数などは問題にならない、たった1例でも……」「……標的をしづかに実験を行うべきだ……」といったお言葉が、小生に ah 現象をもたらしてくれました。G・W・オルポートも、アイゼンクの「科学者にとって独自な個人とは多数の量的変数の交差的にすぎない」という考え方をきびしく批判しておりますが(オルポート、今田恵訳『人格心理学』、誠信書房、上、p. 8)、おそらく先生の基本姿勢もオルポートと同様で、しかも、オルポートよりもっと精密に幅広く、「真」の科学の方法を御指導下さっておられるわけで、ほんとうに感謝にたえません。そして、小生の ah 現象のきっかけをつくって下さった千鶴さんにも、そしてまた、太田垣さんにも、感謝にたえません。

まずは、心からなる御礼の言葉のみにて失礼申上げます。

1974年2月3日

斎藤 幸一郎

#### 斎藤幸一郎先生

貴重な御研究論文、お贈り下さいまして、まことに有難うございました。ロジャーズ批判は、かなり手きびしく、教えられるところが多かったことを感謝いたします。殊に、科学的認識の規準を「事実界」に求められるのは、私も大賛成でして、この部分はロジャーズの所論に決定的な打撃を与えるものだと考えられます。

ただ少し気になる点を申上げますと、現実に研究者と



して、何か云ったりデータを出したりしたときに、それが果して、「事実界」に通じるものだという証明をどうやってやるのかという点が詳しく説明されていないような気が致します。自分のいったこと、考えたことが事実の世界でリアルなものとして実現することのむづかしさを、われわれは常に味っている、悩んでいるからです。これが物をつくる工学者の場合だと、リアルなメカニズムを明かにしなければ物が現実につくられないですから、彼の考えたことが「事実界」に通じるものだという一応の証明は得られることになるのかも知れません。又臨床医家の場合でも、彼の患者の症状への認識、その処方・指示等がリアルなものでなければ現実に患者の病気を治すことは出来ないですから、臨床医家の場合にも、ある程度、リアルな科学性を云々することが出来るかも知れません。

ところが、残念ながら、心理、生理、衛生などの領域の仕事では、研究と実践とのリアル性を証明する方法ないし根拠が甚だ乏しいためにいったい「自分は何をやっているのか」という深刻な反省と疑問にたえず悩まなければならぬと思います。

殊にわれわれのような現場の応用的な仕事をやっているものにとっては、果して自分のやっていることが人間として正しいことをやっているのか、？ という疑問、いいかげんのことをいって世間に害毒を流しているのではないかという心配、不安がつきまとって離れないのです。

われわれは、よく現場の労働の調査に参りますが、その時にいろいろなデータをとります。労働を観察し、労働者に面接し、時間調査をやり、疲労検査を行ない、またはアンケート調査をやるなど、各種各様の情報・資料を蒐集するわけですが、その個々の測定法なり、調査法そのものは、一応信頼度・妥当性などについて、ある程度「科学的」らしい検討を経たものを使うわけですが、問題はそれから後の研究者のやることが問題だと思います。個々のデータをどうやって総合して、結論を出し、企業又は労働の側へ、処方なり、勧告なりを書くかという段階になって、とたんに「科学性」はどこかへ消し込んで了い、全く報告起草者の「主観」によって、結論的に診断し、改善への提案などを書いて了うことになります。彼の考えたこと、認識したこと、提案したことが、果してリアルな科学性をもっているのか、という証明はどこにもないわけです。

「いったい自分は長い間労研において、ほんとに労働者のために、何か意義のあることをやって来たのか？」という悔恨と不安が、つきまとって離れないのです。

序に申上げますと、実践的な領域に關係のある研究者の所論は、非常に彼の生活基盤である研究所の性格などによって大きな制約を受けるように思います。公害などの裁判などでも御覧になるように、住民・被害者の側に立つ研究者と、企業・加害者の側に立つ研究者と、どちらがリアルに科学的なことをいっているのか、全く解らないわけです。実験やサンプル、データのとり方、統計的処理などによって、自分に有利なような結論は、いくらでも簡単に造出できるわけですから……結局、裁判所はどちらの側の実験データも採用できず、裁判官の「常識的判断」によって裁決しているように思われます。

理念としての「科学一般」でなくて「現代における科学」とはいったい何である、ということを、つまり「科学」の歴史的生態を、それこそ科学的・実証的に明かにする必要があるのではないでしょうか。

「科学論」？ に關係のあることを書いた二篇の論文を、別送致しました。いかに、現代の「人間工学」や「労働科学」がにせ科学であるかを読みとて下さったら有難い次第です。

1974年2月16日

狩野 広之

### 狩野広之先生

過日はまたも二つの論文ならびに御懇篤なるお手紙をまことにありがとうございました。望外の御指導にあざかり身の幸せを心から感謝申上げている次第でございます。

つきましては早速に御返信申上ぐべきところ、このように遷延いたしましたのは、一連の論文や御信書によりまして、ショックともいえるほどの感銘をうけ、しばらくは、小生自身の中で頭の整理がつかないままに過ごさざるを得なかつたからでありますので、その点何卒御了承のほどお願い申上げます。

でも、数週間になりまして、何とかこうしておたよりを申し上げる程度に回復（？）いたしたのですが、しかし、相変らず、完全とまでは至っておりません。そこで不完全なままでありますのが、あまりおそくなつてもと存じ、筆をとらせて頂きました。と申しましても、先生から頂いた三つの論文（その内容の大部分について、小生は、全く両手をあげて賛同いたしております）に対してよりはむしろ、直接的には、先日のお手紙で、先生が、小生に問い合わせて下さった内容が、最もショックでもありましたし、ポイントでもあると存じますので、今

日のところは、あのお手紙に対する御返信という範囲にしぼって筆をとらせて頂くことにいたします。

問題は「人間工学」や「労働科学」、もしくは、小生もいくらかかじっております「教育心理学」等を含めた応用科学というものの性格、あるいは、応用科学者のなやみという点に集約できるかと思います。

狩野ショック（？）を通じて、いま、小生が抱くに至りましたひとつの結論的なものは、応用科学というものは、一方には「ほんものは何か」を見きわめようとする冷厳な科学性というものと、もう一方には「世の中を、人間を、子どもを」、「よくしたい、仕合せにしたい、能率的にしたい」という温かい人間性というものと、この両方を、バランスよく一身に兼ね具えた研究者によっておしすすめられてゆくときに、はじめて眞の意味で応用科学でありうる、ということあります。

つまり、先生が御批判の対象となさっておられるような研究者の仕わざの可否は、結局は上の二つの動機に関して、欠陥があるのかどうかという角度からチェックされうるよう思います。たとえば、折角、データをあつめても、「企業または労働の側へ、処方なり勧告を書く段階になって、とたんに科学性はどこかへ消し込んでしまい……」とか、「公害裁判などで、研究者の立つ立場によって……自分に有利な結論をいくらでも造出する……」とかは、上の二つのうちの前者、即ち冷厳な科学性という点で欠陥があると見なければなりませんし、また、たとえば、目的からみて、見当ちがいで無意味なデータあつめのやり方をしたり、「さし絵」としての価値もないような数字やグラフを羅列して能事終れりとしているようなのは、後者、すなわち、温かい人間性の動機において欠陥があることを意味していると考えます。但し、バカとハサミは何とやらのたとえの通り、そういう欠陥者でも、前者の欠陥者なら、ときには政治家その他の実践家としてなら使いもの（？）になるかも知れませんし、後者の欠陥者でも、基礎科学者としてなら、ときに存在理由を認めないわけにはいかない、といったこともあるかも知れません。

ところで、応用科学者としてのこうした欠陥者は、その資格のないものとして切り捨てて論外にしてしまえば、あとは問題が残らない、というのならいいのですけれども、正直のところ、最もむづかしい問題がまだ残っているように思います。つまり、先刻申しました「バランスよく一身に兼ね具える」という言い方の中での、バランスとは何かの問題です。

応用科学者としても、最もまちがいのない、つまり、最もにせ科学ならざる、そして、その意味で、最も「罪

なき」姿勢を保とうとすれば、けっきょくは、最もデータに忠実に、しかも、データから一步も出ないですのが一番だ、ということになります。しかし、これは、基礎科学の場合でさえ殆んど不可能なことです。たとえば、ガリレオの  $S = \frac{1}{2} gt^2$  の方程式であっても、それはデータそのものたんなる記述とまとめではなく、データを「近似的にのみ」（先生の1973年12号論文 p. 727右段上から5行目のお言葉）示唆しているにとどまるものである点は、先生の御指摘の通りです。つまり、ガリレオといえども（彼自身は“私は理論を立てない”といったそうですが）、データから一步飛躍したところで落下の法則に到達しているわけです。まして、応用科学者の場合は、「眞実なのはデータだけで、データ以外のことは何もわからない」などといっていたのでは、彼の温かい人間性がそれで満たされるわけがありません。むしろ、応用科学の応用的価値は、データをふまえ、しかもデータをこえたところで、はじめて実現されると見る必要があります。

かといって、こんどは、温かい人間性に動機づけられているならば、データをどんなにこえてつき進んで結論を出してもよいのか、というと、こんどは、彼の冷厳な科学性の動機がみたされないということになって、おのずからブレーキがかかるはずであります。

といたしますと、結局のところ、応用科学というものは、振子が右に左にゆれうごきつつも、けっきょくは、バランスのとれたある平衡点をめざして減衰振動してゆくような、そういう「進歩」の仕方をする性質の科学ではないか、と考えるようになりました。

このように考えますと、応用科学者としての論外者（先刻、バカやハサミにたとえたような研究者）を、先生がなさったように、この上なく痛烈に糾撃し、排除する必要がある一方、こんどは論内者（？）（つまり応用科学者らしい応用科学者仲間——同じアナのむじな？）については、各研究者の振子が多少とも右や左にふれていようとも、人間わざの限界はお互いさまのこととして寛容に認めあいつつ、しかも、互に切磋琢磨しつつ、平衡点をもとめて、ともに協力しあう以外、致し方ないのではないか、と考える次第です。

でも、小生のこんな考え方自体にもどんなアナがありますことやら、不明なる小生にはまだ見ておりませんので、今後とも、何卒よろしく御指導の程おねがい申上げます。

まずは、全くの御返信のみにて失礼申上げます。暖くなつてまいりましたが、先生にとりましてもこの春はすばらしい季節でありますように。千鶴様にもどうぞよろ

しく。

1974年3月8日

齊藤 幸一郎

**齊藤幸一郎先生**

3月8日付の御手紙ありがたく拝見致しました。御手紙にある「応用科学者のバランスの問題」は、たしかに要点をついています。現実の問題としては、確かにそういうようにして、生きてゆく他はないし、自分でも、御指摘のような意識で、なんとか仕事に携っているような気が致します。

ただ、結局、あえて科学としての理想像を求めるようするとこの前の御論文で、強調されたような「事実界に照合」という問題が残るような気が致します。「……もはやレフアレンス・グループなどに問うよりも、直接、月の石に問うて……」という記述は、かなりこたえました。それと、「認識論的二重操作」の考え方方は注目すべき発言だと思いますが、どうも私にはまだ充分理解できないような、本論文の中でもつともむづかしい章ではないかと思います。たとえば「主観的認識者を、科学的認識者たるわれわれの側にあって……」という処など、なかなか、理解困難です。多分私が認識論などを余り勉強していないためだらうと思いますが、いつか又機会がありましたら、御教示の程をお願い致します。

1974年3月10日

狩野 広之

**狩野広之先生**

早速に御返信を賜わりほんとうに恐縮に存じます。まして、このたびもまた、御返信では、「先生の」ではなく、「小生の」論文なり手紙なりの内容においてきて下さいまして、それについて的確なお問い合わせを下さっておられ、いよいよもって恐縮に、また、ありがたいことだと存じております。同じ内容のお問い合わせは、先生の過日のお手紙でももっと一般的なお言葉でお示し頂いておりましたのに、先日は、それにお答え申上げる心のゆとりもなくあのような御返信にとどまってしまい、申訳ありませんでした。

また、小生の「バランス論」は、科学論というよりも科学者の心得論というところに逃げこんだようでもあります、バランスなどというのも何か知ら甘く不安定な感じで、全然自信がなかったのですけれども、先生のおたよりの「現実の問題」としては、確かにそういうようにし

て、生きてゆく他はないし、自分でも……」というお言葉で一応の御容認を頂きましたので、幾らかホッとしているところでございます。

ところで、それによって勢いを得て、もう一言つけ加えますと、応用科学者（応用科学者に限らず現代ではおそらく科学者一般）に必要な要件としての冷厳な科学性の動機と温かい人間性の動機というものを、バランスよく兼ね具えるべきだと申しますのは、二つの動機をたして二で割って、いわばぬるま湯のような動機の持主であるべきだということではなくて、大変欲ばっているようですが、二つの動機は二つながら十全に、最大限に機能すべきだという考え方でございます。但し、神ならぬ身の人間わざとして最大限に、というより仕方がなかろう、というのがオチであります。また、あちらたてればこちらが立たずは世のつねなり、などといいかげんにあきらめるなら、その瞬間、その研究者は、（ロジャーズはからうじてその手前にいるのかも知れませんが）、前回の手紙でたとえたバカとハサミの仲間に入ってしまうだろう、というわけです。

さて、本日の本論として、まずそのひとつもまた、上の中の、「神ならぬ身の人間わざとして最大限に」というところがひとつの結論になるかと思います。前々回の先生のお手紙に「果たして事実界に通じるものだという証明をどうやってやるのか」という御設問がありました。その「証明」の原理は、小生の考え方では、何の変哲もない、至って単純なものでしかありません。つまり、要するに、手にしたデータにものを言わせること、以外のものではありません。また「事実界に照合」というのも、観念論の立場や前提にかかりついていない人にとっては（先生をも含めて科学者ならばすべて観念論者ではないでしょうから、そういう人にとっては）、「データに照合」ということと同義語だということになります。尤も同義語といっただけでは不十分でして、むしろ、次のように言いかえさせて頂きたいと存じます。即ち、科学としては、方法論上の一本道、それも唯一の一本道として、「データに照合」することを通じてのみ「事実界に照合」しようとする以外に手はないのだ、神ならぬ身の人間が有限な人間として最大限に努力してそのようにする他に手はないのだ、と。つまり、事実界は無限であり、あるいはカントのいう意味での永遠に不可知なる「ものそれ自体」であるのかも知れませんが、それを求めて歩む科学者としては、有限な人間でありますから、人間らしい仕方でその事実界に幾らかずつでも接近したければ、直接的には、手にしたデータに照合することができるだけで、それ以外に方法はないだろうという

ことあります。よって、科学者に残された唯一の努力の方法は、データのつみ重ねであり、また、より事実界に密接したデータを集める、ということになります。肉眼で月を観測して得たデータしかないなら、そのデータにものを言わせることが、その時代における真理の源泉だったでしょう。その後、望遠鏡を使うことによってデータが得られるようになったなら、そのデータの方が肉眼だけで得たデータよりも事実界に密接して得られたデータですから、そのデータにものを言わせることによって得られた真理の方が、より強い真理となります。それがさらに、宇宙船でもって来た月の石を手にとって得たデータにものを言わせたことが、望遠鏡という手段だから得たデータにものを言わせたことと矛盾しているなら、われわれは、当然、後者をすべて、月の石にもとづいて得た前者を、より強い真理として採用することになります。尤も、どちらのデータがより事実界に近いものかは、実際には、月の場合ほど単純にはいかない場合もあり、そのゆえにこそ、特に人間科学などでは、論争のたねはつきないという次第ですが、(論争のたねは、このような、データとデータの間の比較の問題以外に、同一のデータ源泉からたてられた異った仮説の間の論争ということもあり、むしろ学界では、この後者の方がにぎやか、むしろにぎやか過ぎるようですが)、方法論そのものの大まかなところは、上記のように、単純で、一本道のようなものだと考えております。ここで、先生からの御設問「データが事実界に通じるものだという証明は……？」に直接的な形でお答え申上げますなら、小生の考え方では、肉眼を通じてであろうが、望遠鏡であろうが、月の石を手にして得たものであろうが、データとはすべて事実界からのいわば「神の声」であるのに対して、乏しい(人間わざでは、データはいつでも乏しいものしか得られないでしょう)データを通じてその向う側に想定されたもの、すなわち、その時代その時代なりの科学的真理(理論)は、いわば「人の声」であって、こちらの方は、事実界を人間に脚色した形のものでありますから、科学の進歩とともに捨てられることもいくらもありうるものであります。しかし、データの方は、「神の声」のたとえの通り、人間によって捨てられるものではないでしょう。たとえば、望遠鏡によってデータが得られる時代が来たからといって、それ以前の肉眼によって得られたデータが捨てられるのではなく、より精密化され、いわば、補間もしくは外挿されるだけであって、その意味で、データそのものがいつでもそのまま、事実界に通じるものだと考えております。そんなわけで、小生は、人工的な理論なり、だれそれがたてた法則

なり、といったものが疑問であるなら、いつでも、データに舞いもどりさえすればよいのだろう、と考える次第です。

つぎに、この辺で「認識論的二重操作」という奇妙な言葉づかいの概念についてお答えさせて頂きたい存じます。と申しましても、これは、言葉づかいだけが人心をまどわすおそれがあるだけで、実際には、これまた、何の変哲もないことでして、心理学者なら大ていは、ときに、知らぬまにやっていることにすぎない、ということをまず申上げておかなくてはなりません。その例として、たんなる説明のための架空の例をあげさせて頂きまして、次のようなのはいかがでしょうか。教育相談のカウンセラーのところへひとりの母親がきて、「家の子は学校で先日、盗みをしたというのでみんなから不良少年扱いをされているが、ほんとうは家の子はこの上なくすなおな子で、あまりすなおなものだから、悪い友達のさしつけ通りに動いただけだったのです。」と訴えたとします。この場合、カウンセラーが、その母親の言った通りをそのままに額面通りにうのみにすることもできるでしょうし、あるいは、うのみにせずに、親にありがちな親バカ的なバイアスのかかった発言としてその分だけ割引してうけとることもできるわけです。この場合、前者のうけとり方は、認識論的二重操作をやっていないうけとり方であると考えます。つまり、そのとき、カウンセラーは、その母親の発言内容をそのままにデータとし、そのデータにもとづいて処置を考えてゆく、ということを意味します。つまり、ここでは、そのカウンセラーは、母親がわが子を見る目というものをカウンセラー自身の目の代りをするもの、つまり、カウンセラーの目の「出先機関」として単純に考えているわけです。しかし、もし、そのカウンセラーが心理学者だったら、彼は、心理学者としてそれこそ彼自身があまりにもすなおすぎるわけです。すなおというよりも素朴すぎるわけです。したがって、この際どうしても必要となりますのは、その母親の発言内容そのままもたしかにデータに違ひなく、データとしてそれを記録にとどめるべきでしょうが、同時に、母親のメンタリティそのものを観察の対象とし、それについてのデータをも併記することです。つまり、この場合には、カウンセラーから見て、その母親は、科学者としてのカウンセラーの「助手」ではなくて、子どもと同列におかれた観察対象の一部であるわけです。そして、後者のデータ、つまり母親を観察することによって得られたデータを、前のデータ、つまり母親の発言内容から得られたデータにからみあわせることによってはじめて、そのカウンセラーの、「その子どもに

についての」認識が事実に近いものとなってゆくわけだと考えます。小生が認識論的二重操作などと変な言い方をいたしましたものは、実は、こうした、誰でも（特に人間関係の問題などを扱かうとき）やっていることでしかないわけです。

あの論文で、どうして、こんなことを、事あらためて述べなくてはならなかつたのかと申しますと、ロジアーズが、上の例でいえば、母親（つまり実践家）の位置にとどまつたままで、同時にその姿勢のまま、科学者（上の例では教育相談のカウンセラー）でもあろうとする無理な試みをしていると考えたからです。実践家として渦中にあつたままで、その姿勢のまま、その同じ時刻に科学者でもあるなどという芸当は人間わざでできることではなく、実践家としての自己をも含めて、つまり実践家（クライエント中心療法のカウンセラー）としての自己とクライエントとを、ともに冷厳な観察の対象として対象化（ロジアーズの最も唾棄する言い方ですが、あえてこう言います）してみる姿勢に切りかえなければ、人間科学をおし進めることはできないだろう、というのが小生の主張であったわけです。

ついでながら、つけ加えますと、小生自身のカウンセラーとしての経験でも、カウンセリング中に、クライエントの心の中が「見えて」くるためには、こちらが、少くともそのときには、クライエントを「対象化」してみる科学者の姿勢ではダメで、やはり、こちらも一個の血の通つた「人間」に立ちかえ（？）り、いわば、クライエントとともに歩む（ともに悩む）位置に自らを置く必要があります。つまり、そのとき、カウンセラーは、科学者ではなくて、純粹に実践家なわけです。このことは、つまり、科学者として相手に対するかぎり「見えて」来ないあるものが、一たん、実践家としてのカウンセラーの姿勢に立ちますと、はじめて「見えて」きて、それをもデータとなしうる道がひらけてくるということ、ここに、ロジアーズがはつきり指摘したひとつの発見があったと思います。しかし、ロジアーズへの批判点はそれから先のところでありまして、小生の考えでは、一たん、カウンセラーの立場に立ったときに「見えて」きたクライエントの心の中味、その動き、といったものをもデータにするときに直ちに必要になるのが、実は認識論的二重操作なのだ、というわけです。つまり、カウンセラーとしてクライエントの中に「見た」あるものは、それがそのままにクライエントの中に「あった」その通りのものなのではなくて、カウンセラーからの感情移入なり、その他のなんらかの作用によって、いわば、カウンセラーから作り出されたあるものであり、し

たがって、そのものは、カウンセラーのメンタリティの関数としてのあるものである、としてみると、はじめて、かたよりのないデータとして科学の俎上のものとなしうる、と考えたわけです。カウンセラーがカウンセラーなるがゆえに「見た」ものをそのまま素朴にデータにするのと、そのものをカウンセラーを通じてはじめて生じたその向う側にあるものとしてデータにするのとでは、一見、大した違ひはないようでありながら、科学のたてまえ論からすれば、殆んど正反対ともいえるほどの違いがあるということが、小生のあの論文でのひとつの論旨であった、という次第です。

以上で、お答えになっていましたかどうか、それにしてもこんなに長たらしく書かせて頂いて、貴重な先生のお時間をとってしまいますが、想いますと心苦しく思います。それにしても、あの論文では、先生のような方にさえも論旨が通じないで、折角読んで頂きました、「なかなか、理解困難で」というお言葉を頂きましたことを考えますと、小生のあの論文は如何に舌たらずのものであったかと、深く反省いたしております。つきましては、その中に機会がありましたら、もっとわかりよい論文を何かに書くことにしておこうになりました。小生に対し、そうした動機づけをあたえて下さいました点でも、先生に対し心から感謝いたしている次第でございます。

まずは長文乱筆にて失礼のみ申上げました。

1974年3月13日

齊藤幸一郎

#### 齊藤幸一郎先生

御論文を拝読しいろいろ考えて見ました。非常に内容の深い意味深長な論文でして、思考能力の低下している私のようなものには、かなり厄介な仕事になりました。しかしいちおう御礼の意味で、何かを言わなければならないという、せっぱつまつた感を抱かざるを得ません。

以下に述べるようなことが、高堂のいおうとしていることを、はたしてほんとに理解しているかどうか、きわめて怪しいものですが、とりあえずの感想としてお目にかけることをお許し下さい。（特にロジャーズ氏のものは、まるで知りませんし、又臨床的手法についても無経験なもののことですから、御読み捨て下さるようにお願い致します）認識論的二重操作の御考は科学的認識の根本問題として極めて重要な発言だということは、この前から感じておりました。特にこんどの論文は、その御考

えを、かなりすっきりしたかたちで的確に表現されたものとして貴重なコントリビューションだと思います。

対象のリヤリティをいかに的確に把握できるかという問題は、カウンセラーのみならず、心理学者、とくに複雑な人間的印象を取扱う研究者は、いづれも苦心している点ではないかと存じます。クライエントから与えられた言語情報・その他のインフォメーションが、必ずしもREALなものでないという御説はその通りだと思います。(Aプロセス)

私などもいくつかの災害のケース・スタディを行った経験などに従事しても対象者の言うことは必ずしも事態を正確にとらえていないことがしばしばあります。客観的事物をかなり誤解していたり、あるいは、彼自身の妙な個人的偏見で解釈しているとみられるケースがしばしばありました。特に自分自身の内的・心理的プロセスを分析することは、専門家でない労働者にとっては、すぐぶる苦手のようあります。結局自分がなぜあんなことをしたか、解からないというのが実情のようあります。

彼自身の生の言語的表出などから、何らかのREALな事態についての的確な情報を期待することは、かなり無理だと感じております。その点は、やはり研究者のもつてゐる何らかの理論的枠組みから或る程度の推定をするとか、又は御説の通り、その他の外的な裏付資料を充分採用し、あるいは観察し、又研究者の経験——特に類似した症例についての臨床的経験——などを回想し、それらのものをいろいろ補ったり、総合したりして、解釈して行かざるを得ないのであります。ここに認識論の二重操作は必然的に発生してくるのであります。

この点は全く賛成であります。

ロヂャーズが何を主張しようとしているのか、よく解りませんが、もし彼がクライエントからの情報を全く無視して、カウンセラーの持っている枠組みだけから判断してはならない、というのであるならば、現実にそんなことをしている臨床家はおそらく一人もいないでしょう。

又彼が「クライエントの内的経験のありのままについて現象学的認識につとめ、認識したそのままの映像を鏡のようにうつし出してみせる」ことだけでよいので「その他の認識様式を極力排除して下さい」などということは、全く御説の通り、現実のカウンセリング・プロセスでは、まづおこりえないことではないかと思います。

又彼のいう現象学的認識も、そんなことでは、とうてい成り立たない、という御指摘も当然だと思います。

しかしだだ残された点が若干あるように感じました(私の誤解かも知れませんが)——というのは、高堂の認

識論二重操作の客観的妥当性という点です。クライエントのAプロセスが必ずしも REAL なものでないと同様に専門家のもつてゐる非Aプロセスもまた終局的には必ずしも REAL なものでないかも知れない、という疑惑が、どうしても私の頭から離れないためです。この点はデータの綜合の論理・あるいは認識論を、どのようにして深めて行くかにかかっているかと思います。

Aプロセスと非Aプロセス、その他のもろもろの裏付資料をどのように総合するかという道筋は——客観的妥当性云々は別にして——論理的にきわめて重要なテーマのような——新しい認識論として——のような気が致します。

従来の科学的認識は、どちらかといえば、分析的な方面には長じていましたが、いろいろなデータや情報を総合して行く認識面はいづれかといえば、カウンセラーなり、研究者なりの「経験」ないし「研究技能」——悪くいえば、勘的なものに——依存していたように思います。データの総合のための認識論が是非必要ではないでしょうか。

そのような意味におきまして、高堂の認識論的二重操作の理論は、これを深めて行けば、新しい論理学・認識論が発展する希望を充分もたせるような感をもっております。盲評御許し下さい。どうも有難うございました。

(何らかの機会に直接お目にかかる、いろいろお話しを伺うことが出来れば幸です)

1975年1月19日

狩野 広之

### 齊藤幸一郎先生

先日は御高著御恵贈賜まわりまして、まことに有難うございました。相当苦心して読まして頂きました。あれから三日がかりでよみ、私の感心したところ、教えられたところ、疑問に感じたところ、など、もういっぺん書き抜いて整理してみましたところ、私の書き抜きは相当細かい字で約25000字(400字詰めにしたら60枚)位になりました。

認識論的二重操作という考えが、(齊藤さんの頭の中で)どうして出て来たのか、ということが、本書を読んで、はじめて、私なりに判ったような気がしました。この前頂いた論文では、いきなりロージャズ批判のようなことが書いてあったのでなんのことかよく判らなかったのです。そのために、見当ちがいの質問のようなことを申上げて、まことに失礼になって丁寧のを深くお詫び

申上げます。やはり、人の論文は、書いた人の歴史的な心理的プロセス——斎藤さんの人生経験——学問経験、などを追跡してゆかないと、ほんとに判らないものだということを、痛感しました。とかく批評家というものは、言葉に現れた「現象のことば」に囚われて、あげ足を取ったり、くさしたりしがちのもので、ほんとの「了解」には達していないものだと思います。結局、自分の立場から人の論文を読むからだ、と思います。結局、ことばというものが、あるいは、「文字」というものがおっしゃるとおり「曰く言ひ難し」という「意識それ自体的」なことを、完全には代表していない、といえるのかも知れません、ところが、おもしろいもので「シンボル同調仮説」的に、なんとなく判って丁う——私なのに——ようなところもあるような気がして、変な気がしています。

こんどは、私が感じたところを申上げてみると、斎藤さんの認識論的二重操作のプロセスは別に「人間科学」特有の方法ではなく、人間の科学的認識、もっとつきすすんでいえば、人間の「認識論一般」の原型を表明しているのではないか、というシンボル・プロセスが私の頭の中ででき上って丁いました。それで、すこし長くなりますが、次のような私の経験を申上げてみたい、と存じます。私の研究所では、いろいろな領域の人間が集って、研究会を度々やる機会が多いので、私達も、生理学や病理学の連中の研究報告をきく機会があります。そういうのをきいておりますと、連中の頭の中に、ある考えが浮んでくるプロセスは、われわれ心理屋とちっともちがわない、ということに気がつきました。彼らも、別にはじめからいわゆる「科学的」に思考しているのではなく、イメージを内省報告しているのです。

たとえば、肝臓の解毒機能のプロセスを説明する場合に、あたかも肝ぞうの細胞の中の物質の運動を見て来たかのようにしゃべるのです。別に連中は、動物の肝ぞうの中にもぐって行って実際に見て来たわけではないことは確かですから、どうも、自分の頭の中に出来上った、あるいは出来上りつつある物質の運動のイメージを内省報告しているにすぎない、と思います。だから、病理学の連中の内省報告が「客観的」で、われわれ心理屋の内省報告が「主観的」だと、という区別は、どうもちょつ

とおかしいじゃないか、という気がします。

連中が、自分の言うことを——自分のイメージを客観的にするのは、結局、高堂のいわれる認識論的二重操作によって、いろいろの傍証的事実の観察や、既存の理論などによって客観化して提示しているにすぎないので、ものの素材は、彼らのイメージの内省にもとづいているのではないでしょうか。

しかし本書は内省又は内省報告のプロセスを、これ位克明に丹念に解析してみせたものはない貴重な文献だと思います。

これは、科学一般の研究者の研究操作のプロセスを、徹底的に考え方、批判し、悪口をいっている本であるといってよいでしょう。

この位の悪口がいえる人は、余程の学殖——科学方法論全般に亘る考察——がなければできないことで、まったくかぶとを脱いでしまい、また一面、これはすごく良い材料が手に入ったとよろこんであります。

というのは、私は、「科学以前」という論文を書こうと思って、準備しているからです。労働科学というようなはなはだ「科学的」には低級な仕事にたづさわった者にとっては、取扱う対象自体がはなはだ「非科学的」で泥くさく、とても知覚実験者のように、きれいな仕事が出来ません。すごく「偶然的」なメントが災害事故につながっていることが多いので、いったい「偶然」といったことは、どういうことなのか、科学でいわゆる「因果律」というものは、いったい何物なんだらうという疑問が数年来頭をはなれないのです。

書こうとは思っていますが、もう年ではありますし、書こうと思っている中に死んでしまうかも判りませんし、また、こんなものを書いてみたって、どうということでもないし、書こうと思つたり、止めようと思つたりしていましたが、御高著を頂いたおかげで、一つのきっかけが出来かかりました。もし書いたら、高堂を見て頂いて、また御批判を賜りたいと思います。

ほんとに貴重な心の拠り所「内的整合性」を送って下さったことを深く感謝申上げます。ありがとうございました。

1976年5月18日

狩野 広之